

[dōnk]

D O N C どんく

発行

三重日仏協会

SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

〒514-0006 津市広明町418
418, Komei-cho Tsu-shi
TEL 059-226-2766
FAX 059-229-0967

N° 74 novembre 2005 SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

「全国日仏協会の集い」(東京・フランス大使公邸)

フランス大使館と各地日仏協会とのネットワークづくりすすむ

駐日フランス大使館主催による「全国日仏協会の集い」は9月19日(土)東京南麻布のフランス大使公邸で開催され各地から約100人が参加しました(写真)。三重日仏協会からは予定していた豊田会長が急な公務で欠席となったため、代わって井土副会長と首都圏在住の菅谷運営委員が出席しました。会議では、まずベルナルド・ド・モンフェラン大使が最近の全般的な日仏関係についてスピーチされましたが、そのなかで最も必要なのは市民レベルの交流であり、その意味で全国に50以上ある日仏協会の日常の活動がきわめて重要で有効だと述べ感謝を表明されました。そのあと、日仏会館理事長の本野盛行氏のスピーチ、大使館の広報、文化、経済の各担当官から発言、各日仏協会代表の質疑が続きましたが、とりわけ今回力点が置かれたのはフランス大使館と全国日仏協会との情報交換、交流のネットワークづくりの問題で、そのために大使館のホームページと各日仏協会のサイトとをリンクさせる作業がすでに完成したとのことでした。一方こうした状況が生まれたことでそれぞれの日仏協会側もホームページの充実が急務となりました。

◎フランス大使館のホームページは：<http://www.ambafrance-jp.org/>

(目次から「各地日仏協会」へ)



フランスからスペインへ — サンチャゴ巡礼の旅の報告

残暑きびしい9月初旬、尾鷲市、熊野市、紀伊長島町などで「熊野古道」の研究・保護にかかわっている人たちが計画した「もうひとつの古道世界遺産＝フランスからピレネー山脈を越えてサンチャゴ・デ・コンポステラを訪ねる旅」に協賛する形で、三重日仏協会から井土副会長、滝沢事務局長が参加しました。本隊は三日がかりの徒歩で峠の巡礼道を越えましたが、「日仏チーム」はその間、南西フランスから国境を海沿いにスペインに入って本隊と合流しました。二人からその旅の報告を聞きました。



サンテミリオンの葡萄畑から世界遺産の古い町を望む

“巡礼の道”の街への旅

滝澤 秀行

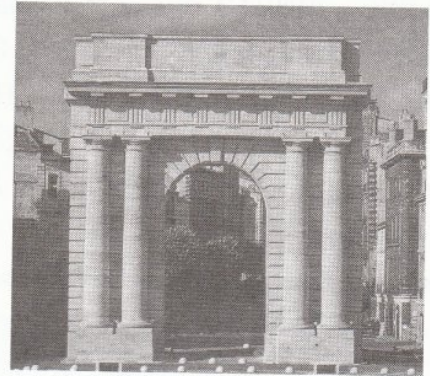
フランスでの初日は、パリ泊となりました。宿は地下鉄ポルトドクリシー駅近くのビジネスホテル、昨年11月ぶらーとひとりで安旅の時のホテルのすぐ近く。移民の人々が多く住んでいる地域でした。夕食は、クルド料理レストラン。私は、シシカバブのような肉料理にトルコ産の赤ワインでパリの初食。今までにない食事となりました。二日目は、ブルーのTGVにてボルドーへ。日中は、三重よりも気温が高くてびっくり、2005年産のボルドーワインは良いのではとすぐに思ってしまうのはワイン好きの証か。最近は当たり年が続いているような、特に2000年はここ10年で一番になるくらいのか。

10年以上ぶりのボルドー、ワインファン憧れの街、旅行者にはとても便利で経済的なものが出来ていました。サンジャン駅から旧市街へ向かうトラム（電気軌道車）です。何度か利用するうちに判ったのですが、1ユーロちょっとの1時間有効券で3路線乗り換え自由、1日券・2日券もあったようです。5～10分間隔で運行しています。夏の観光シーズンが過ぎたからなのか、観光客は団体バスで移動するからなのか、何度乗っても他の観光客らしき人には会わずじまい、トラムでも旧市街のレストランでも、東洋人は私たち二人でした。

ボルドー郊外のサンテミリオン村で、1日ゆっくりしてきました。村全体が世界遺産となっていて、村の周りは名だたるシャトーの所有するワイン畑です。リブールヌ駅から乗ったタクシーの運転手さんが気を利かせてくれ、村の周囲をシャトーの説明つきで案内してくれました。前は、ワイン畑の地図を片手に足で歩いたことを思い出しました。今回は、村の中心部をくまなく歩き、地下の教会のツアーにも参加、世界遺産をたっぷり味わいました。もちろん昼食は時間をしっかりとり、木陰のテラスのレストランでボルドーのロゼワインで乾杯。現地で飲む地元産のワインはまた格別でした。レストランの斜め向かいの坂の途中にあるお菓子の土産やで、フランスでは珍しく一生懸命声をだして宣伝をしていた娘さん。おもわず買った名物のマカロン、日本のものより大きくて美味しかったですよ。サンテミリオン行きの前夜、かつて本会で講演して下さったドマゾー先生に再会し夕食をご馳走になりました。サンジャン駅の前にある魚介のレストラン。主にアルカション湾の恵みとのことだ。生牡蠣のとても美味しかったこと。あまり美味しかったので結局二晩つづけて牡蠣でした。ワインの苦手な人でもボルドーへ行く価値があります、牡蠣とマカロンを食べに。

ボルドーからスペインのサンセバスチャン、パンプローナ、サンチアゴ＝デ＝コンポステラ、へと旅したのですが、スペインでの印象などは、後日ワインを傾けながらということ。

ボルドーのブルゴーニュ門などボルドーとブルゴーニュといえばフランスの葡萄酒の二大名産地で何かにつけて対立的に扱われているものだが、そのボルドー市を初めて訪れ市内電車に乗ってまずびっくりしたのは Porte de Bourgogne という停留所があり窓外に立派な古いアーチ（写真）が見えたことだった。考えてみればパリにもオルレアン門やラリヨン駅などそこに通ずる町の名を冠した場所がたくさんあって不思議はないのだが、何か京都の伏見で「灘門」を見つけたような不思議さを感じた。今回の旅ではその種の「おやおや」がいろいろあったのでご紹介したい。



ブルゴーニュ門

ボルドー市の路面電車

国鉄のボルドー・サンジャン駅に降り立って、まず眼に入ったのはきれいな3両編成の路面電車だった。聞けば最近できたものらしい。市内を3つの路線が自動車に邪魔されることなく走っていて便利で乗客も多いが、使用時間によって料金が異なる乗車カードは各停留所にある自動販売機で買わねばならずこれがなかなかの難物だ。コンピューターに詳しい滝沢さんもてこずっていた。でも自動車優先で市電がどんどん廃止されていくわが国と比べて、この政策は一つの見識だと感心した。

助手席の老婦人

ボルドー酒の名産地で世界遺産でもあるサンテミリオンの村を訪ねての帰路、最寄りのリブールヌ駅までタクシーを頼んだのだが、迎えに来たタクシーの助手席にはすでに一人のお婆さんがちょこんと座っている。さては相乗りの客かと思ったら、運転士さんと親しそうに内輪の話をしているのでどうも家族らしい。フランスのタクシーの助手席は運転士の領分だと聞いてはいたものの、これには少々驚いた。パリで助手席に犬を見かけたことはあったがお婆さんは初めてだ。そういえばこのあとスペインのパンプローナという町の市バスの運転士は傍らに立った若い女性と走行中ずっとしゃべり続け、彼女の降り際にはキスまでしていた。

Nouvelle Orléans

宿のTVでは天気予報とともによくニュースを見た。日本は総選挙の最中だったがそんな話題は全然なく、シラク大統領の病氣入院と米・ハリケーンの惨状を伝えるニュースが目立つ。そのなかで何度も耳にはいる〈ヌーヴェル・オルレアン〉という地名。あのジャンヌ・ダルクのオルレアンの新しいの？そのうちにわかった。ニューオーリンズのフランス語だと。というよりそもそもこの呼び名が元祖なのだろう。モンリオールがモンレアル、セントルイスはサンルイか。なおスペインの放送ではたしかヌエヴァ・オルレアンだった。

10/26 ケベック家庭料理講習会

10月26日、白塚市民センターにて、カナダケベック州出身のドミニク・ド＝ブロア (Dominique de BLOIS) さんを講師に迎えて、料理講習会を開催しました。講師のドミニクさんは現在河芸在住、日本にきてまだ日も浅く、説明はすべてフランス語で、本会理事武田治美さんの通訳のもと、前菜・メイン・デザートと3種類を指導していただきました。日仏の会員外を含む18名の参加者は熱心にメモをとり、出来立ての料理に舌づつみをうった1日でした。ちなみに、メイン料理は、“チーズとプルーン入り鶏のロール” Roulades de poulet farcies au fromage et aux pruneaux でした。



フランスの「暴動」について聞く

11月初頭パリ郊外で起きた若者たちの暴力的行為が、たちまちフランス各地に拡大して世界の注目を集めています。本会会員でもフランスに親しい人がいたり、フランス旅行を計画しているなど、現地への関心が高いと思われますので関連の情報を集めてみました。

▶▶まず、モンフェラン駐日フランス大使は

11日付の「日記」ブログで、この本質はよく言われる宗教的な問題ではなく、恵まれない地区での社会的な危機感によるもので、特にそういう地区に住む若者の集団がメディアの報道だけでつながって騒ぎをおこしている。それも沈静傾向にあり、地域も限られていて、経済活動や観光に何の心配もないと書いています。

▶▶次に亀山市出身でパリ在住の小菅暁子さん。

〈パリ郊外の騒乱は日本ではかなり大げさに報道されているように見受けられます。騒乱はパリ市内から50km以上離れた郊外ですので市内にはほとんど影響はないのです。こちらのメディアでも連日報道されていますが、移民の問題はフランス社会のなかで非常に根深く、白人のフランス人との葛藤や移民同士のいがみあいも「今に始まったこと」ではないので、みな醒めた目でみえています。騒乱が起きた郊外には移民とその家族が多く、いわゆる中流の白人フランス人家庭はほぼ皆無なので、安全保障やその他の問題も移民のなかで起きてしまっている、つまり被害者も加害者も移民たち、という皮肉な結果に終わっているのが事実です。〉

▶▶さらに三重大学人文学部のチェリー・グットマン先生（政治学）は、

〈郊外に住む人々、特に若者にはフランス社会から排除されているという気持ちが強い。実際に、quartiers difficiles（難しい近辺）の若者の失業率は3～4割に昇り、移民の子供達も多く、日常で人種差別に基づく様々な屈辱を味わっている。結果彼らはフランス社会に対して恨みを抱いている。ゆえに、サルコジ内相による幾つかの軽蔑的な発言への怒りの爆発というのは、この暴動の原因というよりもきっかけだと思う。サルコジ氏の頭には2007年の大統領選挙があり、明らかにル・ペンの国民戦線の支持者である極右の票を狙っている。最後に、この暴動が「フランスの同化政策の失敗だ」と世界中で報道されているが、実は私の見方はその逆である。移民の子孫は、デモやストライキを通じて自分の不満を直ちに表現するフランス人の国民性にしっかり同化したからこそ内戦やテロではなく（暴動の死傷者は少ない）激しいデモの形で自らの権利を主張しているのではないだろうか。〉